

子ども用帽子

インド・グジャラート州カッチ地方

帽子(子ども用)(標本番号H0238036、高さ/29.0cm 幅/14.0cm 奥行/14.0cm)

中谷 純江 (なかに すみえ)

大阪大学非常勤講師 本館外来研究員

子どもが祭礼時に頭にかぶるもの。帽子には、子どもを美しく装うという目的の他に、頭というもつとも大切な部分を邪悪なものから守るという役割がある。命名式や食い初め式、結婚式など、人生のさまざまな段階でおこなわれる通過儀礼は、晴れの舞台であると同時に、邪視にさらされ、子どもに災難がふりかかることもある。悪い影響から子どもを守り、無事に儀式をおえることができるようにと、母親たちは帽子を用意する。

この帽子はグジャラート州カッチ地方に住むカンピー(農民コミュニティ)の女性による制作と推定される。刺繍の技法には、糸目のつまった細かい鎖縫いと、糸目を開いて梯子状の文様を描く鎖縫い(オープン・チエーン)が用いられている。対のオウムがひとつの花をはさんで向かい合ったかたちで、

花とオウムの文様が交互に表現されている。このような図柄は、もともとモチという刺繍職人たちがおこなっていたものだが、村々の女性たちも自分の刺繍に取り入れるようになった。しかし、モチ職人の精巧な文様表現とは異なり、民俗刺繍ならではのおお

らかさが感じられる。また、花やトリを抽象的に表現するスタイルには、インド地方(現・パキスタン)からの移住者がもち込んだ刺繍の影響なども見られる。

このように刺繍は、同じ地域の異なるコミュニティや異なる地域からの移住者からもち込んだスタイルの影響をうけながら絶えず変化してきた。コミュニティが継承している技術や文様もあれば、刺し手個人が創造したものもあり、刺繍品から作られた時代や作り手を特定するのはじつはとても困難な作業である。近年は、この地域の女性たちの刺繍技術を生かしながら、都市の中産階級や外国人の好みに合うものを開発する試みのなかで、新しいデザインの刺繍がうまれている。

